

豊かな里地里山を未来につなぐ

栃木県芳賀都市貝町 サシバの里協議会







宇都宮駅から車で東に40分ほど走ると、起伏に富んだ山あい、谷津田と言われる細長い田んぼや雑木林、丘陵の上にある果樹園、曲がり家のような大屋根の古民家など、貴重な里山の景色を見ることが出来る。

こうした栃木県市貝町に点在する家や施設を巡り、里山の暮らしや自然の恵みを活かした飲食や物販、催しを体験できる周遊型の交流イベント「サシバの里めぐり」が11月10日に開催された。「サシバの里めぐり」は年3回開催され今回で19回目。今回は町内5か所の施設が参加する。この日1日かけて市貝町を巡ってみた。

はじめに訪れた「サシバの里自然学校」は、築160年の古民家の前で人懐っこいニワトリとヤギがお出迎え。自然学校校長の遠藤隼さんが、敷地内の里山と田んぼを案内する「ガイドウォーク」に同行する。

「サシバはなぜ市貝町に来るのかな？」遠藤さんは子どもたちに問いかける。

「サシバとは、里山に住む小型のタカです。市貝町はサシバの生息密度が日本一とも言われています。サシバは、田んぼにいたカエルやトカゲやヘビなどを食べ、近くの森に巣を作りまします。市貝町には田んぼと森が隣り合わせにある谷津田がたくさんあります。この環境を守ることがサシバには大切です」

その後一行は田んぼや小川で生き物探し。子どもたちは網を使ってメダカやヒメゲンゴロウを捕まえて観察し、遠藤さんからは田んぼが生き物の成長に与える影響などについて学んだ。

続いて、続谷集落で行われる「続谷ふるさと秋の収穫祭」を訪れる。地元の野菜、特産品や軽食などずらりと販売され、餅つきやステージアトラクション、しめ縄づくりの体験など一集落のお祭りとして驚くほどの賑わいだ。蓮茶を振舞う伊村さんは「休耕田の藪を借り払い蓮池を作り、蓮の栽培をしている。蓮池に小さな生き物が戻ると、サシバが住みやすい環境ができ





る」と話す。

収穫祭の運営を担う、続谷里づくりの会会長の高徳さんと前会長の関澤さんは、「収穫祭を通して集落に賑わいをつくり、人々がつながるきっかけを作りたい」と話す。6月には耕作放棄地を整備した生態系保全地でホタルの観察会を開き、1か月の間に300人を案内する。季節を変え、また訪れてみたいと思う。

築200年を超える古民家を活用した「えんがわらいふ」では、縁側から美しい棚田が目の前に広がり、庭ではヤギが草を食む。ご近所からは漬物の差し入れも。「えんがわらいふ」を運営する田原さんと栗原さんは「市貝町の地域資源を活用した、地域のお茶のみ場を作りたいとの思いがあり、5年前に出会った古民家をリノベーションした。毎月イベントを開催して飲食のお店も開いている。観光地にはない市貝町の魅力を感じてもらえれば」と話す。観光地にはない市貝町の魅力を感じてもらえれば」と話す。

里山から離れた田園の中にある入野家住宅も訪問する。国指定重要文化財の江戸期に建てられた茅葺寄棟造の前で、農村生活研究グループの岡本さんと小嶋さんが新鮮野菜やお米を販売。「市貝町の暮らしは、足りないものがあれば誰かが補ってくれる関係がある」と話す。時おり訪れる観光客との間での温かな交流が生まれていた。

時間の都合上、訪れることができなかったが、「観音山 梅の里(永徳寺)」でも、この日に合わせて観音堂内部の特別開放と、県指定有形文化財の千手観音立像の無料拝観が行われた。

「サンバの里めぐり」を主催するサンバの里協議会は、市貝町で策定された「サンバの里づくり基本構想」に掲げられた取り組みや方針を民間で活動を推進するため2014年に設立された。協議会の構成員は、市貝町内の農業者、商工業者、道の駅、観光協会、環境保護団体、役場職員などから組織されている。

協議会事務局長の遠藤孝一さんのもとと野鳥





の研究者で、栃木県内を中心に長年オオタカなどの猛禽類の調査や自然環境の保全に取り組むなかで市貝町の里山と出会い移住。2016年から先述のガイドウォークの案内を務めた息子の遠藤隼さんとともに、サシバの里自然学校を始めた。

サシバにとって住みやすい里山の環境はどのように保たれてきたのだろう。遠藤さんは「森では炭焼きやシイタケの原木を、田んぼでは稲を育ててきた。こうした農林業の歴史があり、サシバにとって住みやすい環境になった。でも、里山は手入れをして利用しないと生き物が住みにくくなる。そこで農林業だけでなく、グリーンツーリズムとしても利用することで、自然環境が守られ、経済と両立し、地域が持続する仕組みを目指している」と話す。

周囲の里山は高齢化で手入れができない人も多い。そこで、山林や田んぼ所有者から任せられ自然学校で整備しており、その成果として小川や田んぼにメダカが増え始めているそうだ。「サシバの里めぐり」のアイデアは、静岡の山間部で行われる縁側めぐりを学んではじめた。古民家やお茶などの里山の地域資源を使って、外部との交流と多少の収入を得ている様子を参考にした。協議会会長の阿部さんは、家業のお米の配達で市貝町内に長屋門のある古民家や素敵な庭がある家を知っており、声掛けをしていったという。

サシバの里協議会の今後について遠藤さんは「ボランティアの活動では限界があるので、役場との連携を深め、専任スタッフがおけるような持続可能な新たな組織に発展させていければ」と話す。

市貝町の豊かな里山とサシバを未来に繋ぐためには、地域住民と外部の人々の協力が欠かせない。「サシバの里めぐり」を通じて見た里山の景色と住民の人柄は、また訪れたいと思わせる力を持っている。

【連絡先】 サシバの里協議会
メール: k-endo@ucatv.ne.jp

